004 TICA

題名	著者	コメント	コメコメ
邪魔 ―上下巻― （講談社）	奥田英朗	七年前の事故で妻を亡くした警部補久野。同僚の素行調査をし逆恨みを買う。もう一人の主役は、家庭を大事にする普通の主婦恭子。夫の会社が放火に遭い第一発見者でもある夫を疑う刑事と恭子。妻はなんとしてでも家庭を守ろうと夫の犯行の告白さえ受け付けず、刑事は夫を自首させることで恭子を助けようとする―。心に傷を抱える刑事の弱さと優しさが好き。人生を受け止めて解決して行こうとする恭子には、流れるままに生きた「嫌われ松子」のエネルギーがない。まっすぐの弱さっていうのか、もっと開き直れるくらいの不真面目さが恭子にあったら、事態を乗り切れていたかも。久野刑事の続編を読みたい。	グリコちゃんから奥田英朗を大量に借りた。 事故で亡くなった妻を忘れる事が出来ず、支えになってもらっている義母と久野との関係が切なくていい。 ☆☆☆☆
イン・ザ・プール （文芸春秋）	〃	精神科医伊良部のシリーズ第２作目。ヘンテコ精神科医伊良部とストイックな警部補久野を同じ人が書いていると思うと作家ってすごい。久野は生きる事がすごく大変なのに、ヘンテコはいい加減で好き勝手に生きていて、けして愛すべき人間なんかじゃないのに最後はうまいことまとまる。なんかなー。。ヘンテコの言動は、純粋と我儘って紙一重って思わせるけど、誰も差別しないし先入観を持たないし嘘をつかない。そんな人って案外いなかったりするのかな？	「少年ぽさが好き」って女の人はよくおとなの男に言うけど、ヘンテコみたいに「子どもじみた」のは嫌いなんだよね、きっと。その差って、おっきいんだろうね。 ちなみにあたしは、少年ぽいのもガキもどっちもあまり好きくないであります。
町長選挙 （文芸春秋）	〃	精神科医ヘンテコ伊良部のシリーズ第３作目。ナベツネやホリエモンをモデルにし、時の人の心を救う。実際の人たちもこんなことで悩んでいるとしたら愛されるのに。表題の『町長選挙』が一番面白かった。	
最悪 （講談社）	〃	鉄工所の経営者、家庭や会社に問題を抱えた銀行員、ヤクザに追われる青年。３人の人生が後半で交差する。それをやったらまずいだろって言うのが他人にはよくわかるのに、落とし穴ってそんなもんか。	『邪魔』とか『最悪』とかってヘンな題名なのに、インパクトある。

サウスバウンド （角川書店）	〃	今でも公安が周りでうろついてる元アナーキストの父のキャラがすごい。会社勤めをしたことがなく、子どもにも学校に行く必要がないと説き、挙句の果てに沖縄の島へある日突然引越しをする。実家はお金持ちなのに親とは縁を切っている母親、父親が違う姉。そんな家族を小学生の息子が冷静に見つめる。とんでもない父親だけど、退屈しないし子どもはしっかりするしいいかもね。	
明日の記憶 （光文社）	荻原浩	５０歳の広告マン佐伯を襲った若年性アルツハイマー。一人娘の結婚式までは会社にいることを決心し、なくなっていく記憶と戦う姿は痛々しい。ずっと前に放映された同じテーマのドラマでは、主人公の緒方拳が自殺未遂をするが、佐伯は立ち向かう努力をする。	ぷつんと頭の中が切れる音が聞こえるというのはひどく怖い。
推理小説 （河出文庫）	秦建日子	出版社に届いた『推理小説・上巻』という原稿。そこには殺人事件の詳細と予告、そして「事件を防ぎたければ、続きを入札せよ」という前代未聞の要求が……ね、面白そうでしょ？それがねぇ。。主人公の女刑事はある事件から家族ともうまくいかなくなり離婚したあとも娘の言葉をひきずっている。でもその思いには深く触れないなぁと思っていたら、ただの被害者選びの伏線だった。	『アンフェア』っていうタイトルでドラマ化になってた。
失はれる物語 （角川書店）	乙一	大好きな乙一の短編集。最後の一編だけが書き下ろしで、あとの５編はライトノベルの短編集に載っていたもの。乙一のあとがきにあった。どんな種類の本を読んでいる人たちも敬遠するライトノベルでは手にもとってもらえなかったから一般書として出しなおした。それはライトノベルが好きな乙一のある種の敗北だったって。この短編が載っている３冊をネットで頼み、届いたものをみてその装丁に確かに驚いた。まして題名が『きみにしか聞こえない』『さみしさの周波数』『失踪ＨＯＬＩＤＡＹ』。乙一には申し訳ないけど、あたしも乙一じゃなければ手を出さなかったょ。	ライトノベルというのは乙一の言葉を借りれば、漫画やアニメを表紙にした挿絵つきの本のこと。